

母業失格

井上朝子

Tomoko

母業失格

井上朝子

Tomoko Inoue

著者——井上朝子 (いのうえ・ともこ)

1948年2月13日、神奈川県大和市生まれ。1988年社会福祉主事の任用資格を取得し、以後ケースワーカーとして福祉事務所・リハビリテーション専門病院などに勤務してきた。今春、佛教大学通信教育部社会福祉学科卒業。休日は手芸やクラシックを聴いたりして一人で過ごすのが好きという二児の母である。

はは ぎょう しっ かく
母 業 失 格

1999年3月 第1刷発行

1999年4月 第3刷発行

著者——井上朝子 (いのうえ・ともこ)

発行者——坂井宏先

編集——野村浩介・橋原直子

発行所——株式会社ポプラ社

〒160-8565 東京都新宿区須賀町5

TEL 03-3357-2213 (営業)

03-3357-2216 (編集)

03-3357-2211 (受注センター)

FAX 03-3359-2359 (ご注文)

振替 00140-3-149271

インターネットホームページ

<http://www.poplar.co.jp>

印刷所——瞬報社写真印刷株式会社

製本所——島田製本株式会社

©Tomoko Inoue 1999 Printed in Japan

N.D.C.159/198p/19cm ISBN4-591-06069-1

落丁本・乱丁本は送料小社負担でお取り替えいたします。

ご面倒でも小社営業部宛お送り下さい。

ブローグ

私の背丈をとうに超した二人の子供にかこまれ、新年をむかえた。

昨年十二月に口腔外科の大きな手術を終え、まだ流動食しか食べられない長男の博雅ひろまさのために、今年はいつも作るおせち料理がない。どこへ行くでもなければ、なにをするわけでもない。玄関の松飾りだけが正月であることをしめしている。

殺風景ともいえる新年なのに、なぜか不思議と親子三人とも、それぞれ満たされた気持ちですごしている。

こんな気分でむかえる新年ははじめてだ——私は親子三人の生活になってからの年月を思い出していた。

いろいろあった。ほんとうに今までいろいろありすぎた。

息子の博雅ひろまさが五歳、娘の路望ろみが四歳の時に離婚した。そしてその後の私の二度にわたる

入院。博雅が体験したいじめ。路望までもがいじめにあってしまった。“たたかいの日々”といっても過言ではないくらい、毎日なにかとたたかってきたように感じる。ときどき息が切れてしまいそうな時もあった。そんな時は二人の子供のがんばる姿に勇気づけられ、“たたかう勇氣”がわいてきた。

そんなくりかえしの日々だった。でも、これからは違う。なぜかそう感じる。これからはきっと、三人が三様の人生を、淡々と、そして地にしっかりと足をふんばって生きていくのだろう。

博雅は長年の夢であったアメリカ留学に向けて、着々と準備を進めている。

七月まであと数か月。彼はほんとうにアメリカへ行ってしまう。

そして路望は、あんなに好きだったバスケットをやめてしまった。一時は目的を見失ったようだったが、きちんと自分の歩む道を自分で見つけたようだ。机に向かってなにやら必死で書いている。その姿は近寄りたいくらいの迫力があり、まるで作家のようだ。

二人ともすごいよって、心からほめたくなくなってしまふ。そして、そんな二人の子供を育ててきた親としての私を、心の中で“あんだだってがんばったじゃん”ってほめてやりたくなった。

母親をしながら女子大生をやっている私も、今春いよいよ卒業。

『がんばったよ』

これからはもう、そんなにがんばらなくてもいいよって、私の中の私に語りかけた。

よその人から見れば、転んでばかりの親子かもしれない。でも私たち親子は、転んだら起きあがった。そして、起きあがる時にはちゃんと、地面の砂でも石ころでも、なんでもいいからひろうことを忘れなかった。私たち親子は、さまざまな出来事を親子三人、力をあわせて乗り越え、そして今、それぞれの夢に向かって着実に歩を進めている。いろいろあったから、いろいろあったからこそ感じる充実感なのだろう。

人は生きていく上でさまざまな出来事に遭遇する。それは時には残酷なこともある。私の勤務する病院にも、そんな出来事に遭遇し手足の自由を奪われながらも必死に生きよう

としている多くの患者さんたちがいる。

遭遇する出来事は人によってさまざまである。しかしみんな、おのれの身に起こったことを、さまざまな方法で乗り越えていく。そしてそのあとには、以前には見られなかった世界が広がっている。

『がんばってればきつといいことがある』

当たり前という言葉だが、時として人はこの言葉を忘れることがある。

でも、苦しい時こそ思い出してほしい。

『がんばってればきつといいことがある』と……。

親としての私は、今なんともいえない満たされた気持ちでいっぱいになっている。親としての幸せを身体いっぱいを感じている。

私にこんな幸せを与えてくれた二人の子供、博雅、路望。

お母さんをお母さんにしてくれてありがとう！

母業失格

養丁——右馬廄智久

緊急入院

予想外に長引く入院に、少々いらつきはじめていた。

ベッドでただ寝ているだけの毎日。毎日なにもしないでもすごせることの苦痛を痛いほど感じる。焦り^{あせ}にも近い気持ちですごす毎日。私がこんな気持ちになるのだから、子供たちもきつと我慢できなくなってきたに違いない。いったいいつまでつづく入院なのか？

三月、子供たちの新学年がスタートする直前のことだ。私は持病の腰痛が再発して体調をくずしていた。長くつづく^とまた以前のように精神的にもつぶれてしまいそうで、いっそもは飲まない痛み止めを飲みながら仕事に出ていた。

そんな矢先だった。家で突然悪寒^{おかん}に襲われ、たおれて身動きできなくなってしまった。

激しい嘔吐は身体の中でのなにか変化が起こっていることを知らせているように思えた。不安感が全身に広がる。身体を引きずりながら受話器までたどり着いた。

「おばあちゃん、動けない」

それだけいうのがやっとだった。母はとんできてくれた。母は目の前の私の異常な状態にびっくりし、すぐに受診することをすすめた。

当時私はリハビリテーション専門病院のケースワーカーとして働いていた。自分の勤める病院の内科外来まで気力で行き、医師になんともいえない気持ち悪さと嘔吐をくりかえしていることを伝えた。

しかしとくに診断はつかず、

「消化のいいものを食べていればなおりますよ。どうも神経質なようですね」といわれた。

私は仕事を休むこともできず、ふらふらしながらギリギリのところまで日々すごしていた。そんなある日の夕食時、いつものようにおかゆを食べていると、娘の路望が、

「お母さん、目が黄色いよ」

といった。路望にいわれて鏡を見ると、たしかに目が黄色い。それになんとも生気のない顔をしている。

二年前腰椎椎間板ヘルニアで入院した時、彼女は小学校の二年生だった。彼女の父親と離婚した当時、ずっと寝込んだ状態がつづいていた。腰痛に加えて精神的にも限界となり、とうとう入院してしまったのだ。腰の痛み以上に、心の痛みが大きかったといえる時期でもあった。

父親との別離に加え母親が入院するという事態は、彼女を不安とさびしさのどん底につき落としたことだろう。しかし彼女は、それ以来私の健康をとっても心配し、家の手伝いをしてくれたり、とても私を気遣ってくれている。

「明日先生に診てもらう日だから、いってみるよ」

「お母さん、絶対だよ。絶対に無理しないでよ」

翌日、主治医に、娘に目が黄色いといわれたことを伝えた。正直なところ、主治医に神

経質といわれていたので反応がこわかった。しかしそれよりも、自分の身体の異常のほう
がもっとこわい。ある種の危機感を全身で感じとっていた。

「そういわれてみればそうですね。じゃあ念のために採血しておきましょう」

私の危機感とはうらはらに、主治医の反応は呑気だった。

私は午後に予定していた子供たちの授業参観に行くことにした。

身体のだるさを引きずりながら、お昼休みから休暇をとり、時間にまにあうように授業
参観に行った。授業参観はかならず行くようにしてきた。学校での子供たちの姿を見るの
は大好きだ。家では生意気なことをいっていても、親の姿にはにかなんだり、はりきつた
り、時にあどけないとも思える子供の姿を見ると、私まで元気が出てくる思いだった。そ
してあらためて、「この子たちのためにがんばらなければ」という新たな勇気がわいてくる。

五年生の息子、博雅ひろまさのクラスと、四年生の路望ろぼうのクラスと、一時間を半分に
して参観し、懇談会に出席するほうを後半にもっていくというのが私のいつものやりかただ。今回

は、博雅が新学期早々おなじクラスの山田くんにいじめられているのが気になり、懇談会は博雅のほうに出席すると決めていた。

ところが、路望の参観を途中でぬけだし、博雅の教室に向かうあたりから急に悪寒がしてきた。博雅の教室にたどり着き、うしろの棚に寄りかかっていたが、頭がもうろうとしてきて立っていることもできなくなってしまった。たおれて見苦しいところを見せたのは、かえって子供に心配をかけてしまう。そう思い、教室をぬけだし、職場までもどることにした。

無理をしてまた身体をこわしてはならない。二人の子供に私がしなければならぬことは、入院して二度と子供たちにさびしい思いをさせないことだった。

「井上さん、すぐに内科外来まで来るようになって」

職場にもどり、席に座るか座らないかのうちに、同僚がいつてきた。

病院で働く私にとって、医師からの呼び出しはよくあることだ。しかし外科系の患者を

中心に担当する私に、内科の医師からの呼び出しはめずらしい。悪寒のする身体をようやく内科まで運んだ。すると主治医がとんできた。

「すぐに入院してください。動かないで！」

「えっ、入院ですか？ いったいなんなんですか？」

「急性肝炎です。車椅子をもってきますから、すぐに安静にしてください」

私はなんだかわからないうちに車椅子に乗せられていた。

これが長い入院生活のはじまりであり、博雅が受けたいじめとのたたかいのはじまりだったのだ。

医者とは、早急に入院しなければ危険だといった。

子供たちにどうやって伝えたらいいのだろう。そして子供たちの面倒は誰に見てもらったらいいのだろう……混乱している頭の中に浮かぶのは、やはり母の姿だった。

ヘルニアで二か月入院した時も、七十歳をすぎた母に子供たちの面倒を見てもらった。

そのときに精神的にもつぶれてしまった私を見て、母は情けなく思ったのだろう。退院した私に、

「一人で子供を育てるといふのは、病気になった時のことも考えて、手立てを確保しておくといふことだ。それくらいのは覚悟をして離婚をしたのだろう。もうあなたが病気になっても二度と手伝いに来ないからね」

そういつて帰っていった。この言葉の裏には、子供のために二度と病気をするなという母の気持ちがこめられていたように思う。しかし今回の緊急入院に際しては、母に応援を頼む以外に手立ては思いつかなかった。

「わかった。すぐに行く」

母はなにも聞かずに来てくれることになった。

思っていたより状態が悪いことは、その日の主治医や看護婦の動きで感じとれた。個室への隔離、数回にわたる採血。

「手はしびれませんか？」

にはじまり、

「百引く七は？ それからまた七を引いて」

と医師は引き算の問題を出してきた。意識障害をうたがっている。ということは、私はいつ劇症肝炎になってもおかしくない状態なのだ。

『おいおい冗談じゃあないよ。私は死ねない人間なんだよ。母子家庭の母親が小学校五年と四年の子供を残して死ねるかよ！ 神様少し考えてよ』

そんな私の気持ちとはうらはらに、症状はまったく改善の傾向がない。

このままの状態が長くつづくようなら、大学病院へ移ることも検討しているらしい、と母は私に話した。私の勤務する病院では血漿交換ができないので、重篤な肝炎じゅうとくの患者は大学病院と連携をとって転院させている。やはり私の症状はそれだけ重いのだ。

『負けるものか』

私は心の中で何度も何度も叫んでいた。